

労働者協同組合物語

第7回：E. T. クレイグと ララヒン協同コミュニティ

中川雄一郎（協同総研理事長 / 明治大学）

おそらく、突然降って沸いたような「悲劇」がなければ、ララヒン協同コミュニティは「長期にわたりもっとも成功した」と言われるオウエン主義コミュニティになったことだろう。だが、後の研究者たちは、1831年から33年のわずか3年程しか存続しなかったにもかかわらず、ララヒン協同コミュニティ（正式名称はララヒン農業・製造業協同組合、*Ralahine Agricultural and Manufacturing Co-operative Association*）を、「成功した協同コミュニティ」であった、と評価しているのである。例えば、ベアトリス・ポター（ウェブ）は彼女の名著 *The Co-operative Movement in Great Britain*（1893年）のなかで「成功した協同コミュニティ実験」と言い、A. L. モートンは *The Life and Ideas of Robert Owen*（1969年）で「成功したと思われる、オウエン主義路線の唯一のコミュニティ」と強調し、そしてR. G. ガーネットに至っては、*Co-operation and the Owenite Socialist Communities in Britain 1825-45*（1972年）において「共同生活と社会的平等に基づくもっとも成功した実験」と非常に高い評価を下しているのである。

ララヒン協同コミュニティは、短命であったにもかかわらず、何故にこのような「成功」の評価を後の研究者によって与えられたのだ

ろうか。結論を先取りして言えば、それは、ララヒン協同コミュニティの崩壊が協同コミュニティ内部の原因によるものでも、コミュニティを取巻く経済的、社会的それに政治的原因によるものではなかったからである。ララヒン協同コミュニティは存続している間は繁栄していたのである。その崩壊の原因は、アイルランドでオウエンが行なった講演を聴き、オウエン主義に感銘して、若きオウエン主義者のエドワード・トマス・クレイグに自分の農場経営を託したアイルランド・クエア州のララヒン農場の所有者、ジョン・スコット・ヴァンデルアーが「賭け事に負けて、ララヒン農場を抵当に取られてしまった」という、何とも形容し難い「悲劇」であったのである。まさに、クレイグと協同コミュニティの構成員には「寝耳に水」の出来事であった。

短命であり、しかも「喜劇的悲劇」としか言い様のない原因によって崩壊せざるを得なかったララヒン協同コミュニティの「成功」について、われわれとしても少しくその中身を探っていくことにしよう。そうすることによって、ララヒン協同コミュニティはクレイグのために彼の労働者生産協同組合思想の卓抜さを明らかにしてくれることだろう。

る」ということになっているからである。コミュニティは「自動草刈機」の台数を増やしたので、それによって余った時間を建築に充てることができる。労働等に関わるあらゆる取り決めは委員会によって確定されるのである。

ヴァンデルアー氏は、旧制度に従った方法で地代を得ている。すなわち、過去7年間にわたる農業経営の平均地代を受け取り、それに加えて、かつては自分の農業労働者であったコミュニティの組合員に対して相応のバターや家畜や他の農産物を供出するよう要求している。

コミュニティには1組合員週当たり半ペニーを拠出する疾病基金が設置されていたが、先に開催された集会で、その基金は、疾病の事例がないこととその恐れもない、という理由で廃止された。既婚者は自分の住宅をもち、独身男性は共同寝室で睡眠する。コミュニティにはまた、クレイグ氏が管理監督する幼稚園(infant school)が設置されており、子供たちは農業の他に彼らが望む別の仕事を教えられる。既婚者は、自分の住宅で料理しても、共同の厨房で料理しても構わない。夕食は、独身男性は男性同士で、独身女性は女性同士で摂らなければならない。食糧品は非常に安価であって、マトン1ポンド(重量)が僅か4ペンスである。(ヴァンデルアー氏が経営する羊毛工場の)女性労働者の賃金は、平均して1日当たり5ペンスなので、14ポンド(重量)のポテトが僅か1ペニーで買えるのである。

組合員がいかなる宗教(カソリック、プロテスタント、非国教派)を信仰しようとも問われることはない。コミュニティはさまざまな信条をもつ人たちから構成されているので、集会は熱気に包まれている。

2. ララヒン協同コミュニティの「店舗」と「労働紙幣」

まとまりのないマロニの報告であるが、それでもこの報告からララヒン協同コミュニティのアウトラインを垣間見ることはできる。すなわち、ララヒン協同コミュニティは、オウエン主義に基づいた小規模なコミュニティで、クレイグの指導の下で9名の組合員から成る委員会によって運営されている。コミュニティには「労働交換銀行」があり、組合員はその交換銀行で「労働紙幣」を生活必需品と交換する。コミュニティは繁栄しており、組合員も品位のある生活を享受している。協同コミュニティでの労働(仕事)は組合員自身によって決められる。生活に関して言えば、既婚の組合員は自分たちの住宅をもちることができるが、独身の男性組合員は共同の住宅で生活する。食事については、独身の男性は男性同士で、独身の女性は女性同士でとることになっている。コミュニティには幼稚園が設置されており、子供たちには一種の農業を中心とする職業教育が行なわれる。結婚には規定があり、特に男性組合員がコミュニティ外の女性との結婚を望む場合には、その女性はコミュニティで1週間労働し、コミュニティ内の人たちの理解を得なければならない。食糧は非常に安価であり、アルコール飲料はない。

ララヒン協同コミュニティについてのこのアウトラインは、実は、マンチェスターやストックポート、オルダムそれにロッチデールなどでクレイグが研究かつ実践した体験のなから創りだされ、また適用された事柄に外ならない。実際のところ、クレイグは、1825年に設立された「マンチェスター職工学校」で講義を聴き、その図書館を利用して勉学を

場で生産された品物、それに衣類、燃料の原材料などと引換えられる」ので「店舗での通貨として」流通し、組合員はこの店舗の食糧品や他の生活必需品の品質・量・価格が純良・適正・安価であったことから店舗を利用したとのことである。この「店舗」は、ララヒン協同コミュニティによって経営・管理されたことを別にすれば、やはりニュー・ラナークの「店舗」に類似した施設であったと言えるだろう。

それでは、組合員にとって「労働紙幣」はどのような意味をもったのだろうか。「労働紙幣」の役割を考察すると、ララヒン協同コミュニティにおいては「労働紙幣」と「店舗」とが密接不可分な関係にあったことが分かる。

ララヒン協同コミュニティでは、労働の価値の評価レートを「その時の、その地域の労働者の通常の賃金」に基礎をおいていたので、発行される労働紙幣の価値もそのレートに合わせていた。労働紙幣の発行については、当初、組合員から反対されたが、労働紙幣と(アイルランド社会で)流通している「硬貨」とも交換できるとしたことによって、反対の声はなくなった。むしろ組合員は間もなく「労働紙幣の利益」に気づいた、とクレイグは次のように述べている。

労働紙幣の利益は、間もなく、組合員の儉約にはっきりと現われてきた。彼らは、雇用、賃金あるいは食糧品の価格について何ら心配することはなかったし、欲しいだけの量の野菜を食べることができた。幼児と子供の食事と教育のための費用は共同基金で賄われた。...(以前は)ボロ着を身に付けていた農夫、貧しい身なりをしていた農夫が(今では)2着の服を持ち、労働紙幣で

儉約したお金(money)を所持するようになった。すべてこれらの結果は、(コミュニティの)外部の農民と彼らは同じ名目賃金を受け取っているのであるから、本当のところ、わが体制の経済によって達成されたのである。²⁾

他方、クレイグにとっても、労働紙幣がコミュニティ内で、とりわけ店舗において流通してくれることは大きな利点であった。というのは、この協同コミュニティは地主であるヴァンデルアーに年総額900ポンドもの地代・賃料を現金で支払わなければならなかったのであるから、コミュニティには必要な現金の不足が常に予測されたので、労働紙幣を流通させることによって現金の不足が賄われた、と考えられるからである。クレイグは、「(借地)618エーカーに対して年900ポンドの地代を支払っている」のだから、協同コミュニティにとっては「本当のところは、そのうちの僅か268エーカーが占有され、耕作されている」にすぎない、と述べている³⁾。それでも、ララヒン協同コミュニティが繁栄している、とクレイグをして言わしめたのは、組合員が店舗で生活必需品と労働紙幣を交換して、生活と労働を成り立たせることができたからである。別言すれば、ほとんどすべての組合員の労働と生活がこのコミュニティ内部で完結し得たことによるのである。事実、ララヒン協同コミュニティは、オウエンの期待にもかかわらず、小規模な集団(成人男子35人、成人女子23人、少年・児童23人)であって、その小規模さが協同組合事業経営の条件やコミュニティにおける民主主義だけでなく、財務的な実行可能性に対しても有利に作用した、と考えてよいだろう。これらの点については、クレイグが作成した「規則」を考

ける経済性と効率性を保証する」ために、巧妙にも、「規則」にはない「利潤分配」を利用した。オウエン主義の基本思想は協同コミュニティに共有財産システムが確立されるまで「利潤分配」を認めないにもかかわらず、「相互協同のより公正な原理は、労働から生じる利潤を分配することによって、骨折りの仕事の十分な報酬を保証する。これは正義の原理である」⁶⁾、とクレイグは主張して、地代700ポンドと家畜・農機具などの賃貸料200ポンドを支払った残余の利潤部分を、先ずは組合員が共同で享受する「共同資本」と「社会保障」に、そして次に個々の組合員に「より高い報酬」を保証する「骨折り仕事の十分な報酬」に振り向けたのである。これは、明らかに、組合員個々人の労働意欲を高めるための方策であった。

さて、クレイグはララヒン協同コミュニティの「目的」を次のように規定した。

- (1) 共同資本の獲得、
- (2) 貧困、疾病、精神疾患それに高齢による困難に対する組合員の相互保障、
- (3) 労働階級が現に所有しているよりも大きな、生活を安楽に過ごすための品物の分け前を取得すること、
- (4) 成人組合員の精神的、道徳的改善、
- (5) 組合員子女の教育。

われわれは、クレイグのこの「目的」を見て、(1)～(3)のそれはかつてウィリアム・キングが示した協同組合の「目的」に重なることに気づくだろう⁷⁾。また(4)と(5)にしても、労働者階級のための職業教育や他の教育がかなり遅れていたアイルランド社会の現状を反映しているとはいえ、キングが彼の『協同組合人』で述べているところである。その点で、クレイグは、キングと同様に、「コミュニティ建設」について現実的で実際的な方法論を展

開したと言ってよいだろう。

キングは『協同組合人』のなかで彼の目指す「目的」を達成する「方法」をさまざまな視角から論じたのであるが、クレイグの場合は彼自身が作成した「規則」が「目的」を達成する「方法」を明らかにしているのである。ここでは、特に重要な「規則」、すなわち、「生産」条項の第9、10、11、14および15条、「分配およびコミュニティ内経済」条項の第16および17条、「統治」条項の第37、38、39、40および42条を取り上げて⁸⁾、彼の「方法」に論及することにしよう。

「生産」条項の第9条は、組合員各人の精神的、肉体的な能力や才能を農業と製造業あるいは科学に振り向け、その知識を組合員が互いに継承する、また特に青年には確実に継承させるというものであり、第10条は、各組合員は、可能な限り農作業を、特に収穫の作業を手助けすること、またその際には各人は「職場長として行動するのではなく」、同等の組合員として「労働する」ことを強調している。科学や各人の能力・才能を尊重し、農作業を確実に実行する「規則」は、クレイグの「目的」の基本である。第11条は、9歳から17歳のすべての男女に、農業と園芸とともに他の有用な職業を学習することを義務づけ、第14条は農業労働に従事する組合員の報酬（賃金）を決めている（男性組合員は1日当り8ペンス、女性組合員は5ペンス）この報酬は、アイルランドの「通常の賃金」である。第15条は、ララヒン協同コミュニティでの労働のあり方＝「経営参加」の方法を示しているので、全文を記す。

いかなる組合員も、彼あるいは彼女の感情に合致したもの、あるいは彼らが遂行できるもの以外のどんなサービスも労働も遂行

の衣・食・住・教育に関わる費用をコミュニティの共同基金から支出して社会的組織の機能を発揮させること。第2は、「統治」条項で選挙に基づく労働者の経営・管理への参加について明確にし、また組合員に対して経営に関わる情報を開示して「経営参加」意識を高め、「改善提案ノート」を採りいれて参加を具体化していること。そして第3は、「利潤分配」である。ただし、利潤分配は「規則」には明記されていない。とはいえ、利潤分配はすべてが組合員個人への分配とは限らない。「規則」の「協同組合の基盤」条項を見ると、土地および農機具・家畜の所有者であるヴァンデルアーに それらが協同組合の共同財産になるまで 地代および賃貸料を支払うことを記している(第2条)が、これを単なるコスト見なすのか、それとも協同コミュニティの共同財産の基礎と見なすのかによって組合員の「利潤」についての意識も違ってくる。クレイグは、年総額900ポンドをヴァンデルアーに支払った後の残余部分の一部を「共同資本」と「社会保障」に充当しているのであるから、この部分も組合員全員への「利潤分配」であるといえるし、また、先に述べたように、彼はさらに組合員個人へ「骨折り仕事の十分な報酬を保証する」ための利潤分配を認めたのである。いずれにしても、クレイグは「利潤分配」を組合員労働者による経営参加の一形態だと考えたのである。

このようなララヒン協同コミュニティを組合員は実際にどう見ていたのか、それについて参考になり得る手懸りをホリヨークが提供してくれている。ホリヨークの名著『イギリス協同組合の歴史』に、ある旅行者と小さなダムを修理していたララヒン協同コミュニティの組合員との「会話」が記されているので¹⁰⁾、その部分を抜き出してララヒン協同コ

ミュニティについての物語の筆を擱くことにしよう。

旅行者：あなたは独りで働いているのですか。

組合員：そうです。

旅行者：あなたの職場長はどこにいますか。

組合員：私たちに^{スチュワード}職場長はおりません。

旅行者：親方は誰ですか。

組合員：私たちに親方はいません。私たちは新しい制度の下にいます。

旅行者：それでは、この仕事を行なうようあなたをここにさせたのは誰ですか。

組合員：委員会です。

旅行者：委員会とはどんな人ですか。

組合員：組合員のうちのある人たちです。

旅行者：あなたはどのような組合員について語っているのですか。

組合員：私たちにによって委員として任命された農夫や労働者です。私は「新組織主義者」(the New Systemites)に所属しています。

¹⁾ *Proceedings of the Third Co-operative Congress*, pp.79-81.

²⁾ E. T. Craig, *The History of Ralahine and Co-operative Farming*, London & Manchester, 1893, p.76.

³⁾ *Ibid.*, p.76.

⁴⁾ *Ibid.*, p. . . .

⁵⁾ *Ibid.*, pp. . . .

⁶⁾ *Ibid.*, p. . . .

⁷⁾ 拙稿「協同組合運動の黎明：ウィリアム・キングの協同思想」(「労働者協同組合物語 第4回」、『協同の発見』106号<2001年4月>所収)を参照されたい。

⁸⁾ E. T. Craig, *op. cit.*, pp.46-49.

⁹⁾ *Ibid.*, p.47.

¹⁰⁾ G. J. Holyoake, *The History of Co-operation in England: Its Literature and Its Advocates, Volume (1812-1844)*, London, 1875(reprinted in 1971), p.284.